

[書評]

滝波章弘 『〈領域化〉する空間：多文化フランスを記述する』*

高木 彰彦

はじめに

「領域(territory)」とは、一般に、個人や社会集団などによって、管理や排除のために境界で定められた範囲のことを指す。そして、境界を設けることによって発生する支配・制限・統制など領域が持つ性質のことを「領域性(territoriality)」という⁽¹⁾。したがって、領域とは何らかの形で政治性を帯びた空間や場所であり、領域性とは、そうした空間や場所が持つ政治性の特質ということになる。

地理学では、領域性に着目した研究が1980年代以降みられるようになってきた。本書は、こうした領域性の議論に依拠しつつ、著者の豊富なフランス滞在経験を踏まえて書きためられた観光・余暇研究に関するモノグラフを、〈領域化〉⁽²⁾という切り口で一冊の書物にまとめたものである。著者の問題意識は鮮明だ。等質的な国民国家の典型のように語られがちな、フランスの観光・余暇研究が多文化問題に消極的なので、〈領域化〉という切り口から多文化性を取り上げようというのである。一般に、境界研究では、領域化は権力の行使のために空間ないしは場所を画定することを指す。しかし、著者は、こうした政治的・社会的な領域化だけでなく、アイデンティティ、色、雰囲気といった文化的な側面にも注目し、関係的・流動的な視点から〈領域化〉を描こうとする。まずは、本書の内容を簡単に見ていこう。

1. 本書の構成と内容の紹介

本書の構成は以下の通りである。

序章

第1章 パリの場末と郊外の差

第2章 オルネ3000団地とサッカー

* 滝波章弘『〈領域化〉する空間：多文化フランスを記述する』九州大学出版会、2014年。

(1) Derek Gregory *et al.*, eds., *The Dictionary of Human Geography* (Malden: Wiley-Blackwell, 2009), p. 744.

(2) 第2節で述べるように、著者は〈〉を付すことの意味を必ずしも明確に述べているわけではないが、「領域性をもたらすこと」ないしは「領域を形成すること」といった一般的な使い方では政治性に限定された意味とになってしまうことと区別するために、著者は〈〉を付して〈領域化〉を用いていると、評者は考えている。

第3章 セヨン、南仏の丘の上の村

第4章 地中海の港町セットと色彩

第5章 国境が結ぶジュヌヴォワ地域

第6章 ジュネーヴ湖岸のホテル

終章

一見、この章構成とそのタイトルをみただけでは、本書のタイトルにある〈領域化〉と結びつかないように思われるかもしれない。それは著者のもともと関心が観光にあるからであり、著者は、前著⁽³⁾で旅先の風景や幼年期の風景などの「遠い風景」をツーリズム的観点からまとめており、本書もその延長上にある。

長年フランスの観光・余暇研究に携わってきた著者は、フランスの観光・余暇研究が多文化の問題に消極的なことを疑問視する。著者によれば、フランスは均質な空間ではなく、多文化、すなわち、多様な文化が混在し、外の文化の影響が次々に入ってきている状態にあるのである。多文化な状態とは空間が〈領域化〉した状況、つまり、「空間が境界で区切られることで、周囲と異なる特徴的な場所が出来ること」(4頁)を指し、多文化という素材に〈領域化〉という切り口から迫ろうというのが著者の問題意識である。

そうすると、〈領域化〉とは具体的にどのような視点なのだろうか。〈〉を付している点も含めて、詳しくは次章で述べることにして、ここでは、〈領域化〉とは、第一に「領域アイデンティティの問題」であり、第二に「領域を行き来する動き」であり、第三に「領域を満たす雰囲気」、そして最後に「領域に与えられる呼称」の四点を著者があげていることを指摘するに留めたい。

以上のような問題意識を序章で述べた後、著者は第1章で、フランスにおける多文化状況について、人々の語りやガイドブックなどにおける描写のされ方に着目して、パリの郊外と場末との対比を試みる。その結果、移民の多い郊外よりも市内の場末の方が多文化的な場所として描かれていた。また、環状道の外側という物理的な郊外が必ずしも一様に郊外として認識されるわけではなく、多文化性や社会構成により郊外の認識度は異なり、〈領域化〉の様相は場所によって異なるという。

フランスでは、1980年代以降、「シテ」と呼ばれる大都市郊外の団地に移民系住民が住むようになった結果、シテにおけるこれら住民による暴動が頻発するようになった。そこで第2章では、移民が集住するパリ北郊団地「オルネ3000」の多文化状況を描いている。ここでは、サッカーを素材として、欧州系と移民系メディアによる報道の対立を指摘し、壁に書かれた落書きやラップに歌われる歌詞から移民たちの領域アイデンティティの強さを読み取り、文化センターで開催される催しからは開催者間にみられる〈領域化〉を読み取る。そして、著名なサッカー指導者にもインタビューし、〈領域化〉する空間スケールを

(3) 滝波章弘『遠い風景：ツーリズムの視線』京都大学学術出版会、2005年。

ローカルからグローバルへと拡大しようとする考えを見出す。

続く二つの章では、パリから南仏へと舞台を変えて〈領域化〉を描く。まず第3章では、プロヴァンス地方の丘上集落セヨンが、1960年代以降、他地域のフランス人や欧州北部の人々の流入によって再生し、多文化化や〈領域化〉の状況にあることを述べている。セヨンの絵画的な風景を気に入った欧州北部の人々が、最も丘上集落らしい高い場所にある旧家屋を改造して住むのに対して、フランスの農民たちは旧丘上集落の周辺部に住み、両者は〈領域化〉しているという。次いで第4章では、地中海の港町セットを取り上げる。ここでは、観光ガイドブックなどで、セットが色彩・イタリア人・島嶼性というイメージで特徴づけられることに注目するが、こうした三つの特徴が、1980年代以降に市当局によって創られた戦略だったことを明らかにする。つまり、セットは、島嶼性という地理的〈領域化〉と、多文化状況の中でイタリアのみをそのカラフルさとともに強調する文化的〈領域化〉を創り出し、さらに最近では、カラフルさから青色へ、イタリアからコスモポリタンへと戦略を変化させていることを述べている。

最後の二つの章では、フランス・スイス国境地域のジュヌヴォア地域を取り上げ、同地域における国境問題とジュネーヴのホテルにおける〈領域化〉戦略を扱っている。まず、第5章で取り上げるジュヌヴォア地域というのは、フランスにスイスのジュネーヴが挟まれるような形になっている地域で、しかも国境線の透過性が高いため、日常的に越境行為が頻繁に行われている。ここでは、価格の違いによって選択的に為される隣国への買い物行動、「フロンタリエ」という越境労働可能な資格を持つ人々による越境通勤、国境を越えて拡大するジュネーヴ市民の住宅地化の様子などを、さまざまな資料を駆使して描くとともに、国境付近の景観を観察して、国境が境界線というより通過点であると述べる。さらに著者は、フランス人とジュネーヴ人にインタビューすることによって、両者の意識や行動にも〈領域化〉がみられることを指摘する。そして最終の第6章では、レマン湖畔のホテルを対象として、ホテルが持つ雰囲気注目し、ホテルごとに異なる〈領域化〉によって様々な雰囲気が創り出されていると述べている。

2. 〈領域化〉：ジオ・ポリティックなものジオ・ポエティックなもの

以上、本書の内容を要約したが、ここでは、まず、本書のキーワードとなっている〈領域化〉について述べたい。著者は通常の「」ではなく〈〉を用いることで「領域性」に特別の意味を付しているようだ。著者は序章の第2節「領域性から〈領域化〉へ」で、地理学における領域性概念の変遷を辿ったうえで、「領域性は支配、制御、統制を分析する政治的な概念であり、観光・余暇にそのまま使うことは慎まなければいけない。そこで本書では、空間の〈領域化〉という言い方で観光・余暇の現象を把握する。そして、観光・余暇が領域の強弱の変化をもたらす実態、領域が観光・余暇の保持や活性化に利用される様子、領

域をめぐって観光・余暇を实践する人々が交流したり対立する背景などに焦点を当てる」(13頁)と述べる。ここで著者は<領域化>と<く>を付す意味を必ずしも明確に述べてはいないが、領域性という政治的な概念で観光・余暇の現象を説明するには無理があるため<領域化>を用いるということであろう。したがって、この場合の<領域化>とは、文化性や日常性などを強調した意味で用いているものと思われる。

著者は前著『遠い風景：ツーリズムの視線』⁽⁴⁾において、空間を風景として捉え「遠い場所」という視線からツーリズムを論じた。*Faraway Places: Poetics and Politics in the Age of Tourism*という英文タイトルにも示されているように、それは、遠い場所への視線を、ジオ・ポリティックなものとのジオ・ポエティックなものとのに分けるというものである。前者は空間への社会的・政治的な関わり方であり、後者は空間への詩的・美的な関わり方である。前著で著者は、こうした二つの空間への関わり方を対比させながら、遠い場所への視線を描こうとするが、結論的には、両者は簡単には区別できず、むしろ、二つの力がさまざまな形で作用していると指摘する。つまり、「ポリティックなものとのポエティックなものとのが共鳴し合い、強い力が生まれる」ということであり、「風景にはさまざまなジオ・ポリティックな力とのジオ・ポエティックな力が作用し、そうしてできた風景自身もまた、さまざまなジオ・ポリティックな力とのジオ・ポエティックな力を発揮する点」に風景のダイナミックさが見られるのである。

こうした、ジオ・ポリティックなものとのジオ・ポエティックなものとの空間のとらえ方は、境界研究においても示唆に富む。というのも、境界研究というのは常識的に考えた場合、この二元論に従えばジオ・ポリティックなものだからだ。したがって、境界研究者の多くは、「境界地域(border regions)」という対象への視線もジオ・ポリティックなものとのを前提としてきたのではないだろうか。ところが、著者が主張するように、空間に対する関わり方をジオ・ポリティックなものとのジオ・ポエティックなものとのの相互作用として理解するならば、境界地域に対するアプローチの範囲も広がることになるだろう。

「境界地域」を単なる研究対象に留めず、「境界地域研究」という総合性を備えた学問分野に育てていこうとするならば、著者の言う「空間への視線をジオ・ポリティックなものとのジオ・ポエティックなものとのの相互作用」とする見方は有意義なものであることは言うまでもない。この意味で、本書が境界研究に与える示唆には意義深いものがあるし、本書で主張される<領域化>という切り口は斬新なものといえよう。

3. 領域と日常性と地詩学

本書の特徴をもう一つ指摘するならば、それは、フランス社会における多文化状況を徹底した日常性のなかで描写していることだろう。もっとも著者は本書で、観光や余暇活動

(4) 書誌情報は前注3参照。

は非日常的な行為だと述べている。確かに、第1章で描かれているパリ大都市圏の記述は、観光ガイドブックの記述に依拠して空間を分類していることから、周縁性や真正性は非日常的なものである。とはいえ、パリ大都市圏の住民にとっては、場末の周縁性や真正性は、いわば日常生活内の非日常性であり、全くかけ離れたものではない。また、第3・4章で描かれる観光戦略にしても、観光者の視点というよりも、観光サービス提供者の日常生活に依拠した内容である。さらに、第2章や第5章で述べられているのは、それぞれ郊外団地の住民と越境通勤者のまさに日常生活である。

こうした日常生活に見られるミクロな<領域化>について、著者は、生活者の日常生活のリアリティを極めて詩的なタッチで描いている。前著でジオ・ポエティックのことを著者は地詩学と称したが、本書はまさに<領域化>に着目して、フランス住民の日常生活の隅々に見られる多文化状況を地詩学的に描き出した作品といっていよう。

4. 透過性と<領域化>

ハードな意味での境界研究に直接関連するのは第5章で考察されているもののみである。ジュヌヴォア地域における国境線の透過性は極めて高い。透過性が高まれば国境を挟む両側の交流は益々進行するように思われがちだが、著者は、むしろ逆のことを指摘する。すなわち、協定の締結によって、国境を越える移動性の自由度は高まるのだが、両者の緊張が高まる場合もあるという。例えば、フランス側にモスクが建設される可能性が出てきたときに、その向かい側にプロテスタント教会があることから、フランス側ではなくジュネーヴ側から反対意見が表明されたことなどがそうである。また、2002年の二国間協定の締結によって移動の自由化は進んだが、その結果、フランス側にジュネーヴ人によって「浸食されている」という漠然とした感情が強まったとの指摘もあった。

以上のように、国境線の透過性が高まっても必ずしも両側の交流がうまく進展するとは限らないという著者の指摘に加えて、第5章で試みられている透過性の高い国境地域において、二国間の住民の移動や領域認識の相違等を、さまざまな資料や指標・方法を用いて解明しようとする著者の研究スタイルが、境界研究を志す者には大いに参考になることも指摘しておきたい。

おわりに

以上述べてきたように、本書が述べる内容は、第5章を除けば国境を中心としたいわゆるハードな境界研究に直接的に関わるわけではない。しかしながら、本書が目するフランスという多文化社会に認められる<領域化>という概念は、グローバル化が進展し、ますます、領域性と境界への関心が高まる中で、境界研究が諸ディシプリンを越えて総合化の道を歩もうとするとき、あるいは、諸ディシプリン間の対話をする場合に、キー概念と

して有意義なことは確かだ。本書を読まれると、その細かすぎる分析に戸惑う読者もいるかもしれないが、〈領域化〉に着目した境界地域研究は、今後の境界研究の進展には欠かせない着目点である。